



空間 NPO 会報

第57号
2017年4月

発行 特定非営利活動法人 女の空間NPO
〒153-0061 東京都目黒区中目黒1-4-18-401
TEL&FAX 03-3711-5054
発行人 長沖曉子

office@space-for-women.org
http://www.space-for-women.org

定例会

- 5月7日(日)13時半～16時
- 6月4日(日)13時半～16時
- 7月2日(日)13時半～16時

* 日時が変更となることもありますので、ご出席の方は直前にお確かめください。

おしゃべり会



- 4月 (休会)
- 5月21日(日)13時半～16時
「女性監督の映画を観て
話そう Part II」
- 6月25日(日)13時半～16時
「成年後見制度から考える
～私たちが欲しい支援 Part II
事例・ケーススタディ」
担当：長沖、丸山、



女の空間カフェ

第2&第4 月曜日 14時～21時

- 4月10日、24日
- 5月 8日、22日
- 6月12日、26日
- 7月10日、24日

* すべての会場は、女の空間NPO事務所です。

* 予約は必要ありませんが、初めていらっしゃる方はメールでご連絡願います。

office@space-for-women.org

詳細は最終ページ、または
webサイトをご参照ください。
http://www.space-for-women.org

私の未来よ こんにちは

木下礼子

女の空間NPOの事務所には、そこに来る誰かが、気になる映画やイベント、展覧会のチラシを持ちこんでくれる。昨年の6月は東京都美術館の伊藤若冲。行ってみたら入場まで何と150分待ちの長蛇の列。単衣の着物でめかしこんで出かけたが、これでは待っている間に熱中症でへたりこむと諦めて、科学博物館のスピロサウルスに急遽変更（恐竜が好きなんです）。

先月も事務所に映画「未来よ こんにちは」のチラシが置いてくれてあってとても気になった。ヒロインは50代後半の女性。同年代ではないか。しかも同業者。「孤独も時の流れもしなやかに受け入れたなら、未来は再び微笑みかけてくる。」本当かあ？

ちょうど20年前の4月1日、私は2年間のお休みを取り、ドキドキしながら学生生活に足を踏み入れた。仕事を離れて、やりたいことだけをやっていればよいという贅沢。記憶のかなたに消えかけてしまっていた数学や英語と悪戦苦闘の日々だったが、新しいコト・人・体験の連続で、アドレナリン出っ放し。充実していた。

あれから気が付けば20年が経って、昨今の私は、あの時のようなワクワク・ドキドキを感じる事がめっきり減った。ルーティンワークはうまくまりましたよ。でもね……。目の前の仕事をこなすことに追われていて、新しいことに手を出さなくなった。これが私自身への一番の不満であり、そういう自分にイラついている。好奇心だけで生きてきたけれど（そのぶん、失敗も数えきれないが）、その肝心の好奇心がしぼんでしまっている。これはアイデンティティ・クライシスだ。（大げさだけど）

もしかしたら20年前とは違うという時の流れを受け入れていないのかもしれないし、受け入れ方が判っていないのかもしれない。まずは映画を見に行こう。動くことからしか始まらない。

おしゃべり会報告



1月9日（月）

『行動する女が未来を拓く』

—行動する女たちの会 20年の記録—

を観る・語る

行動する女たちが、行動し活動をしていた時期は、私は与えられた仕事をする＝働くだけでした。残業をしているとデモ隊の人々の声が聞こえていましたが遠い声でした。それから幾年月が過ぎ、DVDの中で話している人々と出会い交流する機会を得ました。DVDの中で熱く語る姿に、いまでも底流に熱い思いを持って、いまでも行動し活動しているおんなたちに、いま私は触れていることに感動を覚えました。（のりこ）

「行動する女たちの会」の活動期間1975年～1996年は、わたしが企業で勤めていた年数とピッタリ一致するという符号。当時のわたしは全くアンテナ立ってなかった...ということに改めて気づくキッカケになった。

ま、いまでもアンテナは傾いてるけど...それくらいが、わたしには丁度いい感じ。（m.m.）

DVDの最初に樋口恵子さんが登場した。学士会館のエレベーターで偶然乗り合わせて面識もないのに挨拶をしてしまったことがある。さらに活動家として名前をきいたことのある女性たちが次々と登場した。「行動」していた方々である。そのインパクトは歴史に残る。いまなお、そのオーラは健在。しかし、現在のネット社会では、同じように行動することは難しい。時代にあった有効な行動の仕方とは何だろう。

あの頃、東京にいたら私はその行動に加わっていただろうか。どれほどの影響を受けただろう。なぜ全く無関心になってしまったのだろう。自分の過去を様々に思いだしながら、DVDをみつめていた。（秋谷楓）

2月24日（金）

三浦淳子監督ドキュメンタリー作品

『琵琶の実待ち』を見て おしゃべり

映画の舞台は、老朽化して今取り壊されようとしているあるプロテスタントの女学院である。この学校の卒業生、夏子さんと敦子さんはもうすぐ90歳。彼女たちが入学したときは関東大震災のすぐあとで、講堂は崩壊し、雨漏りがするバラックが仮の講堂となった。数年後に寄付や募金であたらしい講堂が建てられた。その講堂が70年経って取り壊されることになり、彼女たちは母校のお別れ会に行き、若き日を懐かしむ。

講堂の奥に「山上の垂訓」のイエスであろう、ステンドグラスが光っている。ゴシック建築の教会堂は荘厳で暗い祈りの場だが、ここは明るい。敦子さんはごつごつした黒い窓枠を「私たちと同じ」といとしそうになでる。

敦子さんは学校のことをよく話題にするので、娘さんに「お母さんは学校、学校っていうけど、どうしてそんなに学校が好きなの？」と言われてる。夏子さんは母校を「母校に行くと実家に帰ったような気分」と言う。

「実家に帰ったような気分」と聞き、私はびっくりした。「懐かしい」なら分かる。けれど「実家に帰った気分」とは、両親が自分を待ちわび、迎えてくれ、好物を用意してくれる、心からゆとりとくつろげる場所ではないか。私についていえば、学校は実家という感覚からはほど遠い。先生に叱られた記憶のほうが残っている。だからどうしてそんなに学校が好きなのか、不思議に思った。

夏子さんは祭壇に上がりピアノで賛美歌をひいた。誰でも知っているあの曲「主よ、みもとに近づかん、登る道は十字架にありとも、など悲しむべき」

クリスチャンでなくてもこのメロディは心に染み入り、自然に涙が流れてくるような曲である。しかし年齢からしてこの世とはもうすぐ別れなければならない夏子さんはここにこと笑っている。

どうしてこんなに明るいのか。「など悲しむべき」と言いながらも、この世との別れは悲しい。それを喜びと言うのは、「好きなものがあるから、好きなところに行くから」であろう。

明るい夏子さんは私と対極にある。ピアノを弾いていて、あら忘れちゃった、とまた笑う。「ピアノをうまくひけなくても楽しい。まだ〇〇するのは嫌なの。頭からいろいろなことが抜けても、なにかは入れたい」と笑っている。夏子さんの笑顔から「好き！」が伝わってくる。

〇〇が分からなかったが、よく聞いてみると英語のdeflateだった。「しぼむ」の意味で、風船など空気が抜けるときに使われる。“look up, look up, don't deflate!”と先生方はよく言っていた。萎縮しないで上を見上げなさい、という意味だ。夏子さんは先生に何回も言われると、うるさいと思ったが、この言葉は彼女が九州にお嫁に行ったときに力となる。

「田舎暮らしも面白いわね。行ってみたい。」と気軽にお見合いし結婚をきめた夏子さん。夫となる人の会社は九州にある炭鉱である。それまでとは全く違う世界で夏子さんは暮らし始めた。夫は土、日ゴルフに行ってしまう。このとき教会のオルガニストとしての役目が夏子さんを救った。

夏子さんが紅茶を飲む場面がある。紅茶の入れ方も本格的で、香りが観ているこちらにまで漂ってくる。

枇杷の実がたわわになった場面が写り、終わりに『枇杷は秋に花が咲き、翌年の初夏に実がなる』と文が出る。『花も嵐も乗り越えて』というより、もともと種だったものが時間は長くても時間が来れば実をつける、という自然なことを、三浦監督は夏子さんを枇杷にたとえてこの作品を作ったのだと思う。最近暗いニュースが多い中、光と風を心地よく感じる作品である。

(太田達子)

3月26日(日)

成年後見制度から考える

～私たちが欲しい支援



春の雨のなか、初めておしゃべり会に行ってきました。

女の空間NP0の発足当初、Fさんに引きずり込まれて2～3度会合に出たことがありましたが、その後すっかりご無沙汰しておりました。会報には目を通しておりましたところ、今回のおしゃべり会のテーマ、成年後見制度を見つけ、勇気を出して参加しました。

成年後見制度は、近い親族のいない私にとって、そう遠くない将来にきっと必要となる制度であろうから、より有効に活用するためにもしっかりと勉強しておきたいと、4年前に品川区社協の市民後見人養成講座を受講し、以来品川区社協を中心に市民後見活動のはしぐれに身をおいています。最近雑誌にも取り上げられた「品川モデル」のただなかで活動しているので、多少はそのシステムの紹介、説明などできるかと思いましたが、それ以上に組織の中に埋もれてしまって見えなくなっているものはないか、私と同世代の後見制度をまだよく知らない女性たちが何を必要とし、何を求めているのか、現在の後見制度とその運用の仕方に問題はないのか、そんなことを気づかせてくれる場ではなかろうかと期待して、何が出るか、内心ほくそ笑みながら参加した次第です。

今回初めての方が私のほかにもう一人おられて、彼女の語るこれまでの苛酷な経験(親族からの暴力、財産の横領、居宅からの追いたてなど)に一同耳を傾けることになりました。彼女が経験した困難はどれも後見制度以前の問題ばかり。今までに何人もの弁護士を頼んだが甲斐はなく、役所も回ったが、解決はできなかった。本当に援助を必要としている人にそのニーズに応じる受け皿がない。ニーズの形はさまざまで一人一人みんな違っていびつでゴツゴツしているのに受け手の型が決まっているのでうまく入らない感じ。もっとフレキシブルな対応ができるように変えて行くことはできないものなのでしょうか?

2匹の猫とようやく静かな生活を手に入れ、お金はないけど何とか生きていこうと思っていると彼女は話されました。おしゃべり会に来ておしゃべりして、少しは気持ちが晴れたかしら? そうだといいのだけれど……

私たちが欲しい支援について考える会、またぜひ参加したいと思います。(岡部裕子)

